

梶原弘和君が遺してくれたもの

拓殖大学学事顧問 渡 辺 利 夫

私の中の梶原君

本日（2019年10月25日金曜日）は、梶原弘和先生の追悼ワークショップ（於八王子国際キャンパス）にご参集くださり、ありがとうございます。拓大は、特に国際学部は梶原弘和君というかけがえのない人物を失ってしまいました。梶原君のことを一番よく知っているのは私のはずですから、梶原君について知っていることをお話し、これをわが学部の紀要『国際開発学研究』に活字として残しておくのは私の義務だと考え、このような場面を設定して欲しいと学部長の甲斐君にお願いして、今日に至りました。ご参集いただきました先生方には、改めて深く感謝申し上げます。それに、ひょっとしたらこれが私の拓大における最終講義になるやもしれないという感覚もあります。まそんなことで、40分いただきましたけれども、ひょっとしたらそれを少し超えてしまうかもしれませんが、あらかじめ、そうなった場合のお許しを請うておきます。

私は名のある大学で、偉い先生を師匠にもって研究をつづけてきた人間ではありません。いろんな先輩・同輩・後輩の研究にはそれぞれ深い影響を受けてきましたが、やっぱり結局は自分一人で研究をつづけてきたのだと、当時はつらかったこともありましたけれども、今になっ

てみればこれが自負とか誇りとでもいったような気分になっています。

そんなわけで、私はさしてオーソドックスなつまり正統的なアカデミズムの道を歩んできた人間ではありません。ですから、学問的な意味での私の“跡取り”などはおりません。しかし、振り返って気が付けば、後輩ながら梶原君とはいつも一緒になって同じ道を歩いてきたような気がします。ステイタスとかポストとかとはまるで関係なく、ただ学問的な意味で梶原君は何か私の“跡取り”のような気がします。彼の方もそんな気分で私をみていたのではないかと勝手に想像します。

私は開発経済学に関する著作をいくつか書いておりましたが、これを梶原君が亡くなった今になって開いてみますと、その著作の中に「私の中の梶原君」がしばしば顔をだしていることに気付かされています。梶原君と議論をしながらつくった作業仮説、作業仮説を図案化したり、作業のフローチャートをつくったり、それにしているいろんな計算をしたり、まあまあ結果が出ますと、2人それぞれ論文を書いたり、共同執筆したりするというのを繰り返していました。

私の開発経済学の言わば処女作は、タイトルが「開発経済学」、サブタイトルが「経済学と現代アジア」というもので、これは1986年に初版、1998年に第2版が出ました（日本評論社）。

今でもオアゾの丸善では売ってくれています。2000年に拓殖大学で国際開発学部がつくられ、その第1期生から私は開発経済学を講義することになりまして、この本を思い切って簡素化して『開発経済学入門』として出版しました（東洋経済新報社）。この本も第3版までできて、新学期を迎える頃になりますと、東洋経済新報社の担当者から、毎年のように今年は1,000冊増刷といった嬉しい報せがあります。いくつかの大学の授業やゼミなどで使って下さっているようです。なお、この本の改訂には徳原悟君の大変な協力を得ました。感謝しております。

私のことを話そうとしているではありません。こういった自分の著作を眺めていますと、梶原君と一緒に仕事をやっていた頃のことが、随分と鮮やかな記憶として蘇ってきます。以下、梶原君が遺してくれた仕事のことについて、少々、お話してみます。

梶原君は拓大のOBです。大学院博士前期、後期課程も拓大でした。彼が大学院生の頃、私は拓大について、正直のところ全くといっていいほど、知識も関心もなかったのですが、あるきっかけがあって梶原君と深く付き合うようになりました。

私が筑波大学の教員をやっていた頃のことですが、虎ノ門に「国際開発センター」という組織が生まれまして、その創立に汗を流したことがありました。大来佐武郎先生が、当時はOECD、つまり「海外経済協力基金」、その後JICAに統合された組織ですが、その総裁をやっておられました。ちなみに大来先生は、大平内閣で外務大臣をも務めた人物です。しばらく前に大来先生の生誕100年の記念シンポジウムがありまして、私もスピーカーの1人として招かれました。また、ちなみに、篠塚徹君は後にOECD理事をやりましたし、藤本耕士君もこのOECDの重要なスタッフでした。

大来先生のいうのには、日本もこれだけの経

済大国になったんだから、アジアを中心にODA（政府開発援助）をもう少し本格的に展開し、また民間企業のアジア進出もこれからいよいよ旺盛な時代に入るんだから、開発途上国のことに深い知見をもつ人材をもっと沢山つくり出さなければいけないと主張され、「国際開発センター」の創立ということになったのです。その創設に私も関係したということです。

そんなわけで、私は筑波大学の教員生活の傍ら、「国際開発センター」によく出入りしておりました。その頃、梶原君は拓大の博士課程に在籍していたのですが、開発経済学について指導してくれる人間を探していたらしいのです。梶原君は私が「国際開発センター」に出入りしていることを何かのきっかけで知ったらしく、そこに私を初めて訪れてくれました。手ぶらでやってくるというわけにもいかなかったんでしょね。こんな論文を書きましたので時間の空いた時に読んでやってください、というのです。電車での行き帰りにこれをちらちらと眺めていたのですが、ウンこれはいけるかもしれないと読み進むうちに、だんだんウンいける、といった気分になされました。

そこで梶原君の遺したものについての話に入りますけれども、彼の仕事は大きく分ければ3つに分類できると思います。

その1つが、少々、面倒な表現ですが、「要素代替モデル」というものです。2つめが、後に私が「重層的追跡論」と名付けることになる、梶原君のつくったモデルです。3つめが、申すまでもなく「東アジア長期経済統計」の企画・出版の仕事です。

東アジア長期経済統計

われわれに残されている最大のものが、ここにおかれている「東アジア長期経済統計」全15巻であることはいまでもありません。渡辺利

夫監修ということになっていますが、拓大時代の私は、学部長だの、研究科委員長だの、その果ては学長だの総長などをつづいて、この仕事の企画をして予算の確保の道も何とかついたので、とても実務的な仕事には手が回らない。ほとんどすべて梶原君の指揮と監修によってできあがったものがこの統計であります。あと3冊を残して、彼が死んでしまい、私は茫然自失です。吉野文雄君、茂木創君が引き継いでくれることになり、両君には大変にご厄介をかけることになりましたが、どうかよろしく願います。

私は2000年に拓大に招かれました。その時、私が出した、たった1つの条件、この1つの条件がすべてですが、これはその重要性をアジア経済研究所とかJETRO（日本貿易振興会）などにいくら説いても乗ってくれない大仕事、「東アジア長期経済統計」を何とかつくりたい。人材と予算を出してくれれば、後は私は拓大のために献身しますと、当時の理事長の藤渡辰信さんに申し上げたのですが、なんと大学は鷹揚にもこの大仕事を引き受けてくれることになったという次第です。当時の拓大には、まだそんな余裕があったんですね。

ここにおいてあるのが、その成果です。始めてからもう20年以上を経過しております。梶原君がいなかったら、こんな大仕事、できるはずもなかった。つくづくそう思わされています。出版社は勁草書房です。20年以上もこの出版にご尽力いただいた宮本詳三さんには深く感謝しております。

それで梶原君の残したものの3番めの彼の話を最初に申し上げた次第であります。梶原君の残してくれたものの1番めに入ります。これが「要素代替モデル」です。2番めが「重層的追跡論」ですが、ここに話を進めてまいります。

要素代替モデル

まず「要素代替モデル」ですが、私のところに初めてきた時に梶原君が持ってきた論文がこのテーマについての論文でした。できるだけおわかりいただけるように、そのエッセンスについて紹介してみます。

一国の工業化が進んでまいりますと、農業が利用できる工業財、例えば、肥料、農薬、農業機械、灌漑・排水施設、これらが農民に次第に豊富かつ安価に入手できるようになります。そうしますと、農民は労働力を節約するために、例えば田植え機械とか耕運機とかコンバインなどを購入できるようになります。つまり、労働力という生産要素を節約的に利用し、肥料や農業機械をより集約的に利用してですね、農民1人当たりの農産物、つまりこれを労働生産性というのですが、この生産性を上昇させることができるわけですね。

つまり、労働力に代替して肥料や農業機械を集約的に用いて生産性の向上を図る、これが生産要素の代替、つまり要素代替です。

また、アジアの国々では日本や韓国や台湾がその典型ですが、人口の数に比べて土地と申しますか、耕作可能な土地つまり可耕地ですね、これがアジアでは恒常的な不足状態にありました。ですから農民は土地をできるだけ節約して使いたいわけですね。つまり一定の可耕地からたくさんの収穫が可能となるような品種、例えば米の品種改良が試みられるようになります。

実は、1960年代にアジア全域に広がったものが、皆さんもお耳にされたことがあろうと思いますが、「グリーンリボリューション」つまり「緑の革命」です。この革命は、今、私が申し上げた品種改良を通じての土地生産性の革命的な上昇のことです。ここでは、土地という生産要素に代替して肥料や農薬などを大いに利用して

革命的な帰結を生んだわけです。「グリーンリボリューション」が、もしアジアでおこらなかったら、いずれのアジアの国々も、現在の北朝鮮のような飢餓がつついていた可能性があります。

こういう形で起こる、もう一度申し上げますと、一方においては労働力に代替して、他方においては土地に代替して、肥料や農薬や農業機械を集約的に用い、そうすることによってまずは労働生産性、次いで土地生産性が上昇するというというわけですね。これが経済発展を促す。これが「要素代替」モデルです。

このモデルの原型は、しばらく前に亡くなりました速水裕次郎先生と、もう1人アメリカの農業経済学者、バーノン・ルタン (Vernon W. Ruttan) さん、この2人の共著の *Agricultural Development: An International Perspective* (Baltimore, Maryland, Johns Hopkins University Press, 1971) の中で初めて唱えられたものですが、これを韓国農業に適用して1つの農業発展モデルとして仕立てた経済学者が、実は梶原弘和君でした。

この実証研究には、実は、梶原君と私、それにもう1人、韓国人の経済学者で金昌男君という人物がおりました、彼も加わって、3人で共著論文を出しました。金君は私が十数年勤めました筑波大学の教え子です。私の長い教員生活の中で、初の博士号を取った人物です。文大宇君などは、その縁でその後、金君に随分、可愛がられたんじゃないでしょうか。また金君は、私の長男の面倒をよくみてくれ、長男が高校から大学に入る頃にソウルに連れて行ってってくれて、どうやら長男を韓国で「男」にしてくれたようです。

それはともかくとして、梶原、金、私の3人で「要素代替」モデルにもとづく研究をつづけたのですが、その結果を私どもは英語論文として発表いたしました。当時、アジア経済研究所

の英文誌に *Developing Economies* というのがありまして、そこに掲載してもらったのです。若造の処女論文ですが、厳しいレフェリーのコメントに懸命に答えて、どうにか掲載にまできました。

論文のタイトルは、“A Consideration of the Compressed Process of Agricultural Development in the Republic of Korea” (vol.22, no.2, pp.113-136, June 1984), つまり「韓国における農業発展の圧縮過程に関する一考察」というものでした。

これが梶原君のデビュー作です。これがさっき申し上げた私が「国際開発センター」に入りにしていた頃に、彼が私のところに運んでくれた論文の原型です。

梶原君がどこで博士号を取ったかといいますと、東京工業大学です。私は拓大にくる前の10数年間、東京工業大学の教授職にありまして、その間にドクターを何人か出しましたが、梶原君はそのうち最も早い時期のドクターだったはずです。

東京工業大学について一言、余計な話を付け加えますと、私は、当時、私の研究室によくやってきてくれた東工大の院生はもとより、一橋大学の大学院に在籍していた杜進さんなんかも含めてですね、その軍団を引き連れて、この拓大にやってきて国際開発学部の創設に当たったのですが、そのメンバーが誰かという、みんなテレますのでやめます。学部長を含めて皆様ご想像のとおりであります。

圧縮された発展

ところで梶原君の遺してくれたものの2番めの話に移ります。今、私どもの共著論文のタイトルの中にコンプレスト・プロセス・オブ・デヴェロップメントという表現があって、今日お集まりの経済学の先生の何人かは、ニンマリ

してるんじゃないかと思うんですよね。

圧縮された発展、あるいは圧縮型発展という用語方法を私は編み出したのですが、渡辺さんの表現力すごいよねと、何人かからいわれ、そう表現されればアジアの経済発展は確かにその通りだよ、というふうにも何人かからいわれました。この表現、今でも使われています。そんなタイトルをつけた著作が、アジア経済研究所のスタッフから出されてもいます。コンプレックス・ディベロップメント、「圧縮型発展」とやら「圧縮された発展」、あるいは「発展の圧縮型」とかいろんな表現でパラフレーズされて、現在にも残るワーディングのひとつです。

つまり、先発国が発展のために要した歴史的時間を、韓国的发展過程の中に、梶原君は韓国の農業発展の中に、確かに観察できると考えたわけです。私がそれに「圧縮型」という表現を加えて、少々、「商品価値」を高めたというわけです。

1984年の時点で梶原君と私の頭の中には、圧縮型という表現のタイトルをあえて使いたくなるほどに、印象的な農業発展の姿が韓国の中にはあったんですよ。

コンプレックスという表現ですが、どうして私がそんな表現で韓国の発展を語るキーワードに据えるに至ったのかですが、今、振り返ればですね。アレクサンダー・ガーシェンクロンという、当時きわめて有名な発展史家。ロシア経済史を専門としていた研究者の著作にヒントを得たものでした。

このガーシェンクロン先生の議論は、随分と大部の著作、*Economic Backwardness in Historical Perspective* (Cambridge, Massachusetts, Belknap Press of Harvard University Press, 1962) つまり「歴史的視野からみた経済的後進性」という本の中に潜んでおりました。

随分と分厚い本でした。洋書を手に入れるのも大変な時代です。食うや食わずの頃の青春

時代のことですからね。無理して購入しました。私の出身は慶應義塾大学ですが、その時代の院生の頃のことです。まだまだ大学生だった小島真君も加わった研究会で、4、5人のメンバーで、おそらく一か月以上もかけて、カバーツーカバーで読み込んだことがあります。私には非常に刺激的な著作でした。

後世、「後発性利益論」というふうにも私が名付けました。ガーシェンクロンの理論のキーワードです。

わかりやすい例でいいですね。鉄鋼の年間生産量でいいますと、最先発国はもちろんイギリスです。イギリスがトップでしたが、しかし、たちまちのうちにドイツに座を奪われ、そのうちにフランス、ロシアに優位性が奪われ、ついに日本がトップに立つ、というわけです。どうしてそういうことになるかということ、後発国は後発国であるがゆえに、先発国の開発した技術を「借入技術」(Borrowed Technology)として導入することができる。かつまた、先発国からの資本輸入も可能になるから、というのです。

現在の中国の発展などはこのモデルでかなり説明できるものだと私は考えています。加えまして、特に鉄鋼産業のような重工業、重化学工業の場合ですとね、設備の「ヴィンテージ」つまり「平均年齢構成」が若いほど生産性が高いという特徴がありまして、これも加わって後発性の利益がより強く働くということ、ガーシェンクロンは論じていました。

つまり、先発国がある産業発展の過程で要した、つまり発展の歴史的時間を後発国は「圧縮」できるわけですね。ガーシェンクロンがコンプレックスという表現を使っていたわけではありませんでしたが、この著作を苦勞して読んだ時、私の頭の中に浮かんだのは圧縮というイメージでした。

当時の私はおそらく何かパッとひらめくものがあったんじゃないかと想像しています。今の

私はただの老いぼれですが、私にも若い時代があったんだなあと思ったりもします。

話は再び梶原君の「重層的追跡論」に戻りませうけれども、さっき申し上げた「要素代替論」の仕事も終えて、梶原君と私が次に関心を移したのは、後発国の先発国に対する「追跡」、つまりキャッチングアップ、追跡モデルの追究でした。

重層的追跡モデル

国際競争力という概念に私どもは取り憑かれたんです。いろんな競争力指数を探したり、また自分たちでもあれやこれやと考案してみました。

誰でも気がつくことですが、一番簡単に説得力のあるものは、ある産業の競争力とは、その産業の製品の輸出額が輸入額を上回ることですよね。ですから分母に輸入額を取り、分子に輸出額を取る。そして得られた値が1を超えると競争力が強い。1を下回れば競争力が弱い、これは誰だって気がつくことです。

同じことですが、輸出プラス輸入、つまり一国の総輸出を分母にして、分子の方には輸出額マイナス輸入額、つまり純輸出額を取る。これをやってみると、まあそっちの方が少しはましかなとも考えました。

そのうちに梶原君が、最近、ベラ・バラッサ (Bela Balassa) というアメリカの国際経済学者が RCA インデックスというのをつくって、結構、面白い分析をやっているとって、バラッサ先生の論文のコピーを私のところに持ってきてくれました。

RCA インデックスっていいましたけれども、つまりは Revealed Comparative Advantage インデックスのことです。顕示比較優位指数、貿易統計上にはっきりと示された競争力といった意味合いですね。

これどういう指数かといいますと、例えば日本の鉄鋼の競争力という場合、こう計算します。分母の方に、世界の鉄鋼総生産額に占める世界の鉄鋼輸出額をとる。つまり世界総生産額に占める鉄鋼の総輸出のシェア、これが分母です。分子には、日本の総生産額に占める鉄鋼の輸出額を取る、ということです。世界の鉄鋼の輸出シェアが分母、日本の鉄鋼の輸出シェアが分子です。これが1を超えれば超えるほど競争力が高い、逆に1を下回れば下回るほど競争力が低い、というわけですね。

梶原君と2人であれやこれやの計算のトライアルを繰り返すうちに、この RCA インデックス、かなり有用であることがだんだんわかってまいりました。

現在では、この種のトライアル、簡単にできるようになりましたけれども、何しろ30年以上も前のことです。パソコンの容量はまだまだ小さい。何しろ入力する数量、IMF 統計なんですけれども、これが全部、紙媒体なんですね。印刷媒体です。そこに書かれている数字を入力するだけでヘトヘトでした。アルバイトを雇うお金もないしですね。梶原君はまったく1人で、各国別、産業別、商品別に、しかも20年くらのスパンで入力しつづけていました。その結果、「重層的追跡」という発見に至ったのです。

誰にもわかりやすい産業は繊維産業という、当時でも今でも最も労働集約的な作業ですが、これを例にすると一番話が分かりやすい。日米繊維摩擦というのがありましたけれども、アメリカの繊維産業の競争力は急速に失われ、日本が競争力を上昇させる。ところがこの日本もですね、あっという間に韓国やその他の国々に追い越され、これがまた中国や ASEAN 諸国に敗北するという次第でありました。

後発国が先発国を追跡する、日本がアメリカを、その日本を韓国や台湾などが追跡する、その韓国や台湾を ASEAN 諸国や中国が追い上げ

る。そういう追跡の姿が重層化してみえるわけですね。それで私どもはこれを「重層的追跡」というふうに名付けました。

梶原君と私にはこの分野における著作が2つあります。その1つが、大変懐かしい2人の共著ですが、1つは『アジア水平分業の時代』（ジェトロ叢書、日本貿易振興会、1983）、もう1つが、これを少々、エラボレイトした著作『アジア相互依存の時代』（有斐閣、1991）です。これらを総合して書き上げたものが梶原君の代表作が、さきもいきました『アジアの発展戦略：工業化波及と地域経済圏』（東洋経済新報社、1995）です。これで彼は東京工業大学の学術博士号を取得したということです。

農業発展メカニズムから圧縮型発展論に進んで、最後に重層的追跡論にまで至った。これらはすべて、私の開発経済学の主要部分ともなっております。梶原君は、その後は「東アジア長期経済統計」の作成に全精力を傾けていくわけです。すでに発刊されたすべての統計の実質的な監修は私に成り代わって彼が務めてくれたものです。

梶原くんは、私の研究生生活の全過程に関わってくれた若き真摯な後輩であったと、間違いなくいえます。確実にそういえます。梶原君の死を最も深い慙愧の思いで耐えているのは私であろうと思われまふ。そんな次第で、冒頭、申し上げましたように、この話を『国際開発学研究』の活字として残しておきたい。そういう強い思いがあったものですから、少々長い話になってしまいましたけれども、以上であります。ご清聴、本当にありがとうございました。

*本稿は、令和元年10月25日、拓殖大学八王子国際キャンパスにて開催された追悼ワークショップにおける「梶原弘和君の遺したもの」講演録である。

以下の文章は、私がPHP研究所の月刊総合誌『VOICE』（2019年8月号）に寄せた梶原弘和君への追想文である。

ある「師弟」関係

私は正統的なアカデミズムの世界を歩いてきた人間ではないから、“跡取り”などいない。でも、いくつかの大学で、合わせれば五〇年ほどの教員生活を送り、少なくない数の著作を残してきた。八〇年代と九〇年代の終わりには、それぞれ一回連続の、当時「市民大学講座」「人間大学講座」と呼ばれていたNHKのテレビに出演したこともある。そんなことがあって、最近、もう定年に近い研究者達と一杯やっている時、「私は先生の著作を読んでこの分野に入ったんですよ」とか、「あのテレビをみてアジア研究を始めたんですよ」など、嬉しい話を聞かされる。

そういう人の一人に梶原弘和君がいる。当時、虎ノ門にあった国際開発センターで私がある仕事をやっていた頃、こんな論文を書いたのでコメントしてほしいと同君がやってきた。見知らぬ人物だが、しばらく時間を取って読んだところ、これが実によくできているではないか。開発経済学の分野でその頃はやりだしていた、生産要素の“価格・代替・生産性”三者の因果関係について、これを韓国に適用して書いた、それほど長くはないがパンチ力のある論文だった。そんなことがきっかけとなって、共著論文を書いたり、彼の就職先やら海外出張などの世話をさせてもらった。拓殖大学国際開発学部では東南アジア経済の担当教員に就任してもらい、ついに終生の師弟関係となった。

マクロ数量を取り扱う彼の技倆は高い。アジア各国や国際機関の統計年鑑—当時はみんな分厚い本だった—を手に入れては、幸せそうにそれを眺めている彼の姿が思い浮かぶ。新しい分析手法が見つかるや、当時、筑波大学にあった私の研究室に泊まり込んでひたすらパソコン入力をつづけ、少しの疲れもみせない彼の顔立ち

が清々しく懐かしい。この春、冴えない姿で私のところに現れたのだのだが、つい先週、度重なる抗がん剤の注入に耐えられず息を引き取ったという報せが入った。私が八〇歳を超えたの

だから「弟子」達がかくなるのも致し方ないことなのだ、わが身の老いの深さを知るのみである。

梶原弘和先生の略歴と主要研究業績

<略歴>

梶原 弘和 (かじわら ひろかず)

- | | |
|------------|---------------------|
| 1951年 | 福岡県に生まれる。 |
| 1978年 | 拓殖大学大学院博士課程修了。 |
| 1986-88年 | 在フィリピン日本大使館専門調査員。 |
| 1989-98年 | 千葉経済大学助教授・教授。 |
| 1995年 | 東京工業大学より学術博士取得。 |
| 1997-2003年 | 富士通総研経済研究所客員研究員。 |
| 1999年 | 拓殖大学国際開発研究所教授。 |
| 2000年 | 拓殖大学国際開発学部教授。 |
| 2007-19年 | 拓殖大学国際学部教授。 |
| 2009-10年 | 拓殖大学国際開発研究所長。 |
| 2012-19年 | 拓殖大学大学院国際協力学研究科委員長。 |
| 2019年7月13日 | 逝去 |

<主要研究業績>

[単著]

- ・『アジアの発展戦略：工業化波及と地域経済圏』東洋経済新報社，1995年。
- ・『アジア発展の構図』東洋経済新報社，1999年。
- ・『農業近代化の過程（東アジア長期経済統計第4巻）』勁草書房，2008年。
- ・『労働力（東アジア長期経済統計第3巻）』勁草書房，2016年。

[共著]

- ・『アジア水平分業の時代』日本貿易振興会，1983年。
- ・『アジア相互依存の時代：展開するリージョナル・ネットワーク』有斐閣，1991年。
- ・『日本の地域経済とアジア』日本評論社，1992年。
- ・『経済発展と人口動態（東アジア長期経済統計第2巻）』勁草書房，2000年。
- ・『インフラストラクチュア（東アジア長期経済統計第8巻）』勁草書房，2019年。

その他論文多数。